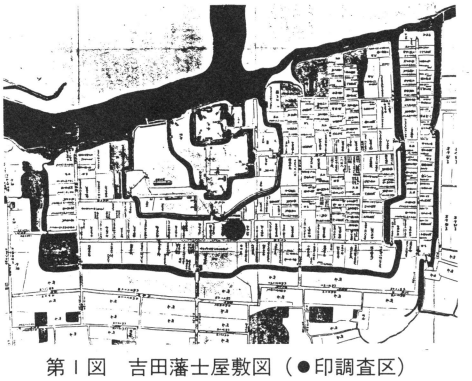
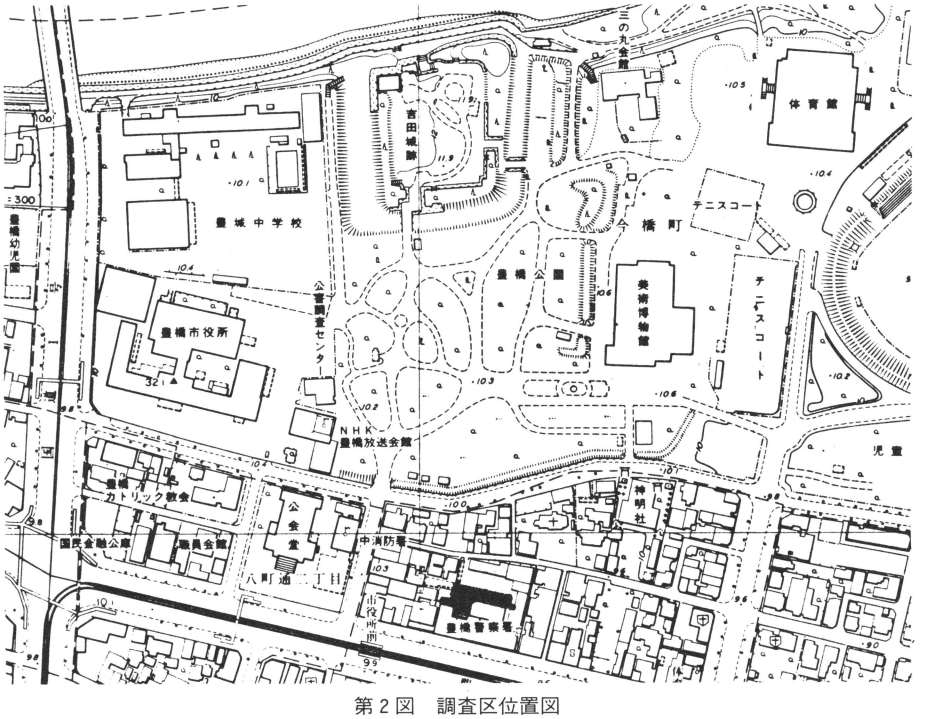
吉田城跡（よしだじょう）

調査の経過

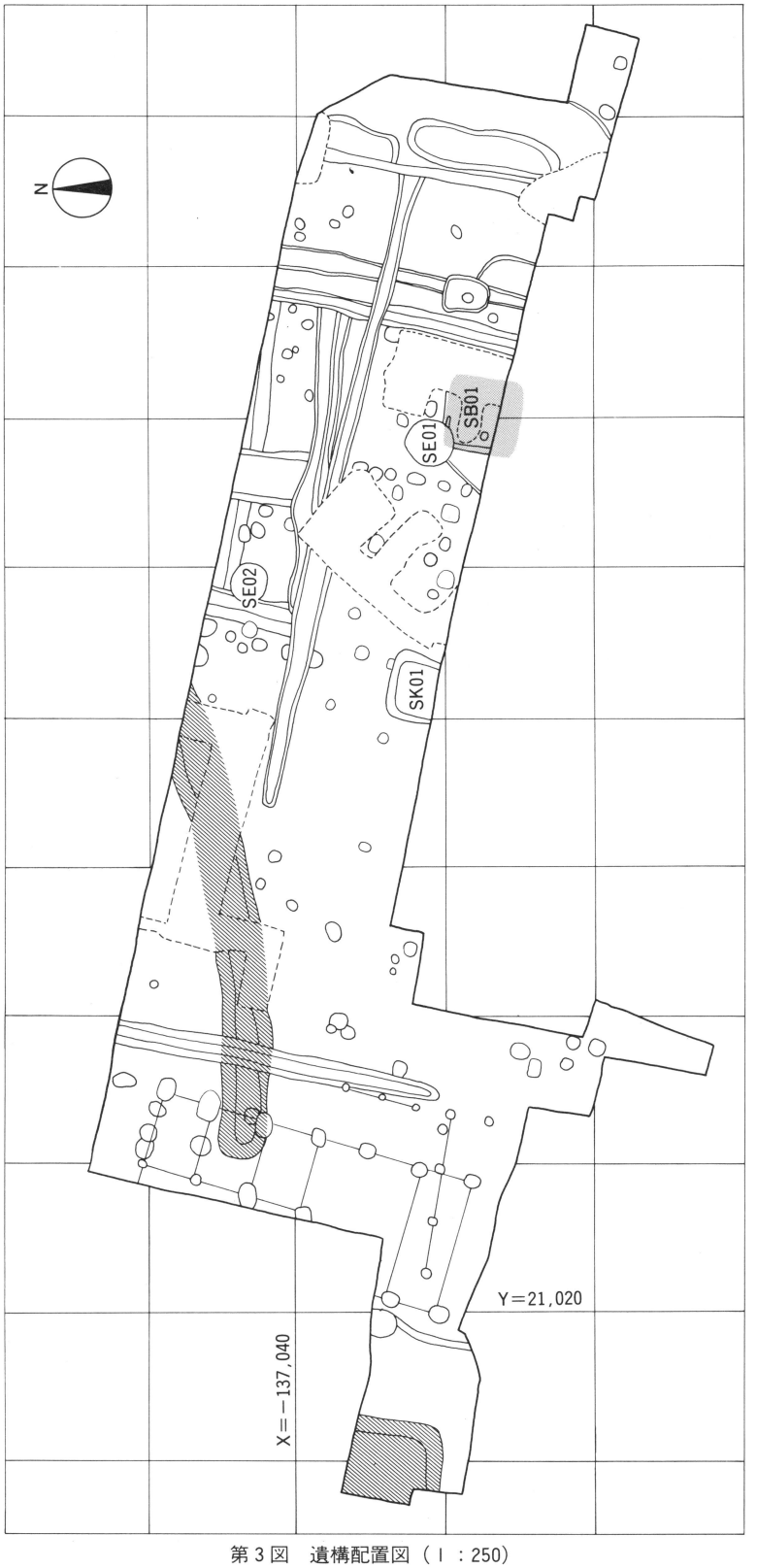
吉田城跡は豊橋市八町通に所在し、豊川左岸、朝倉川との合流点の豊橋段丘上に位置する。この豊橋段丘は街道筋にあたり、古代においては飽海渡、中世では鎌倉街道渡津宿、そして近世には東海道吉田宿として東三河の交通の拠点となっている。吉田城（今橋城）は永正二（1505）年豊川市域に勢力を広めていた牧野古白により創建され、家康家臣酒井忠次の整備拡張により、東三河と遠江境の戦略的拠点となる。この吉田城を近世的城郭に変貌させたのは、天正十八（1590）年に入封した池田輝政であった。池田輝政は在城十年間で城地や武家屋敷地の整備につとめ、84万m²におよぶ広大な城地を創出させる。しかし建設半ばで関が原の戦いの勲功により姫路転封となり、以後幕藩期を通じて6～8万石の大名領となり、城郭自体の完成は見られないまま明治を迎える。



第1図　吉田藩士屋敷図（●印調査区）

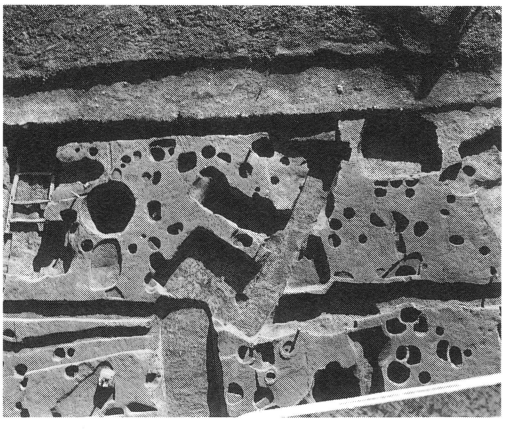


第2図　調査区位置図



第3図　遺構配置図（1：250）
（▨は戦国期の溝）

SB01



調査区中央部

調査区西半部

今回の調査は豊橋警察署の建替えに伴うもので調査面積は600m²である。

調査の概要

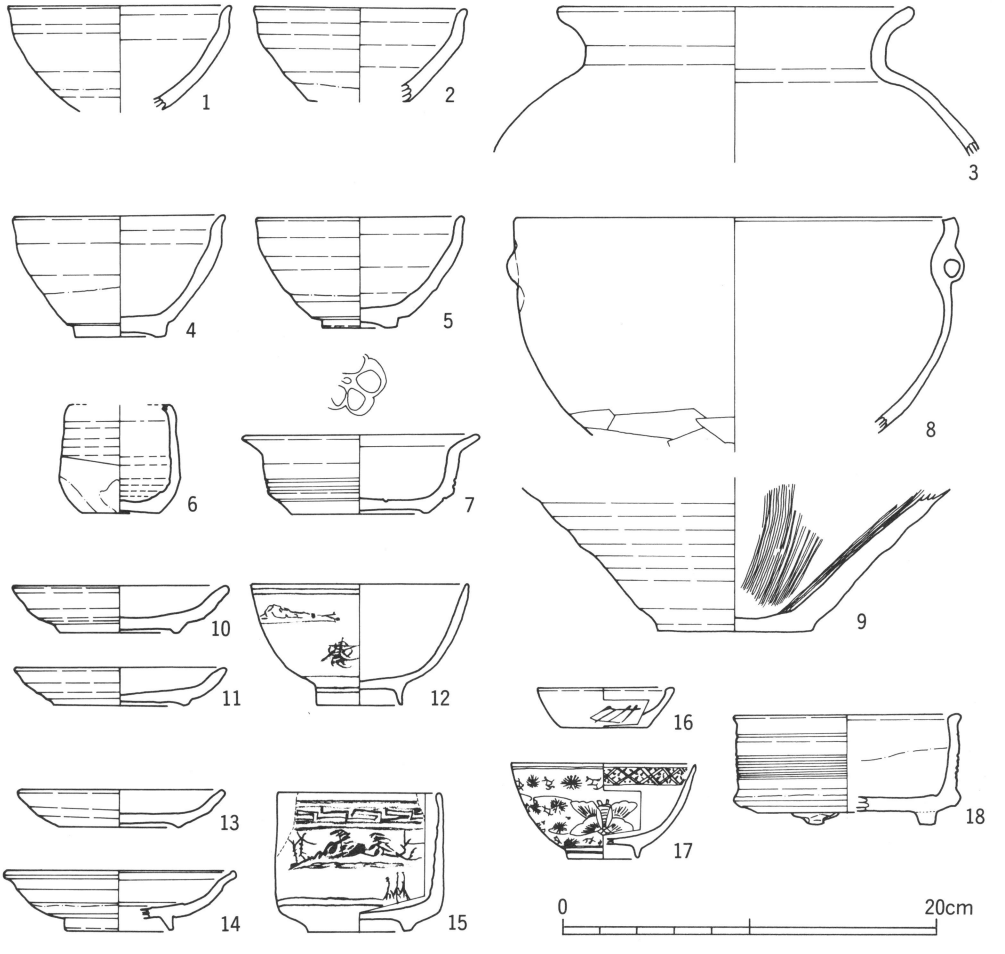
調査区は幕末期に作成された「吉田藩士屋敷図」によれば、家老西村氏の屋敷地にあたる。基本層序は、盛土→茶褐色土→赤褐色土（地山）である。しかし、明治以降警察署用地として活用されていたため建替えや防空壕等による攪乱が激しく、遺構の残存状況は決して良好ではなかった。但し、遺構の深度が深いため攪乱の下層から遺構の底部を検出することができた。今回の調査において検出した遺構・遺物は、古墳時代、戦国時代、江戸時代の３時期に大別することができる。以下、時代をおってその概要を述べてゆく。

古墳時代　竪穴住居２棟を検出した。遺構の大半が攪乱（防空壕）や調査区外になり、規模は不明であるが、周溝の一部や柱穴と思われる土坑が検出されたことにより住居跡と認定した。遺物は床面直上より土師器の甕等が出土した(第４図－３)。

戦国時代　今回の調査で注目された遺構として、調査区西半部で検出された２条の溝がある。１条は調査区内で幅２m、深さは現地表面から２mをはかり、調査区内で収束もしくは西へ屈曲する。後世の遺構により溝の肩は削平されている。他の１条は幅1.5m、深さ0.7mをはかり、調査区西端で立ち上がり、東から北へ円

弧を描くように屈曲している。出土遺物（第４図－１、２、４～９）によれば池田輝政入封以前の遺構であると考えられ、中世吉田城（今橋城）の構造を考える上で貴重な資料となると思われる。

江戸時代　井戸２基、溝数条、土坑多数を検出した。井戸の深さは共に現地表面から約６ｍ程度であり、遺構埋土の観察により屋内に設置されていた事が確認できた（第４図ＳＥ01；10、11　ＳＥ02；12)。溝は１条が東西方向に、他は南北方向に走り、いずれの溝も方位を若干東に振っている。このうち、調査区東端で検出された溝は江戸時代初頭から幾度かの掘りかえしをうけ、明治以降も排水用の溝として利用されていたと思われる（第４図13、14、15)。また土坑に関しても廃棄土坑（第４図ＳＫ01；16、17、18）と思われるものが１基確認された以外は大半が柱穴と思われ、根石を伴うもの、柱痕の認められるもの、及び深度の深い土坑、の３種類に区別することができる。出土遺物としては近世の陶磁器類が中心である。　（川井啓介）



第４図　出土遺物